

1-2歳幼児のリズムおよび音楽的発達における共振の重要性

持田京子

東京福祉大学 社会福祉学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2010年9月25日受付、2010年10月30日受理)

抄録:1歳、2歳の子どものリズム運動の時系列変化を観察し、その結果を小林(1978)、中村(1993)およびSwanwick(1988)の理論から分析した。「げんこつやまのたぬきさん」(事例1)または「れいぞうこのなかになにがある?」(事例2・3)の歌を歌うことの繰り返しのなかで、幼児は日ごとにリズム運動を獲得していった。3事例の観察結果の分析から、幼児が音のリズム中に自分のリズム運動を表出するには共振を手掛かりとしていることが示唆された。共振は、幼児の音楽的発達に重要な要素であると考えられる
(別冊請求先:持田京子)

キーワード:1-2歳幼児、リズム、共振、音楽的発達

緒言

昨今、乳幼児の音楽教育においてデジタル化や早期教育化、メディア化が進み、子どもへ与える音のリズムが多様化する傾向が見られる。そのカウンターバランスとしても、子ども自身が音楽的に感じ表すリズムへ目を向けることは、今後の音楽的成長に必要であることがMcDonald and Simons(1989)によって指摘されている。乳幼児の音楽的発達研究でも、Radocy and Boyle(1979)が、リズム行動の基底にあるものは「リズム構造を知覚する能力」と、「リズム的な運動を演ずる能力である」が「リズム行動に対する発達的研究のほとんどが、(1)音楽の拍に合わせる能力(2)一定のリズムパターンを反復する能力である」と述べ、乳幼児のリズム行動を、音楽的脈絡全体から切り離して評価すべきか、という懸念が音楽心理学者に起きていることを述べている。

青木(2007)は「現在の我が国の幼年期の音楽教育が、生活環境がないままに、教科訓練として考えられやすい」実態を述べ、「はじめにリズムありき」として、子ども自身が持つリズムを生活の中で自ら安全、かつ創造的に表わす力を養う重要性を述べている。また小林宗作の総合リズム教育を研究、実践している山下(2003)は乳幼児期にある音楽は「子ども一人ひとりの中にあるリズムに合わせ、自然界の持つリズムを生かし、自然に身体が躍動し、言葉がメロディになり、生活そのものが歌であり、音楽である」ように考える重要性を述べている。

乳幼児は初めて集団生活に入った園で、自分自身の持つ特性と、人的環境も含んだ環境との相互作用によって次第に発達していく。まだ表情や、身体運動が開かれていない子どもたちは、その生活の中で自らが持つリズムを環境と響き合わせ、個々に感じ表わすことで、音楽的にも成長していく。そこでは青木らが述べるように、子ども自身の持つリズムとその環境に着目することが不可欠である。

集団保育の場にいる乳幼児にとって保育者や仲間との距離は近く、人的環境が子どもの音楽的発達を促す可能性が常にある。中村(1993)は人との関係性によって、諸感覚を通じて人同士が互いにリズム振動を感じることを「共振」という言葉で表している。中村はリズムの根源性に着目し、人の持つリズム振動の根源性が芸術と深く結び付くと考えているが、著者はこの、乳幼児が他と調和し、響き合いながら、「共振」するリズムに注目することによって、その子ども自身の音楽的発達の姿が見えてくるのではないかと考えた。

1～2歳の乳幼児が自ら表わす音楽的表現に関する研究は持田・金子(2008)が行っているが、調査例数が少なかった。小山(2004)の音楽表現に包括されるコミュニケーションの事例研究、細田(2004)の子どものリズムを環境とのかかわりで追った事例研究は、乳幼児が自ら表す音楽表現の研究である。しかしその過程を、「共振」に着目した子どものリズムの研究は見あたらなかった。早期教育や赤ちゃん教育が話題になっている昨今、「共振」に着目しながら本来の子どもの表す自然な音楽的リズムに立ち返って、3歳未満の乳幼児の音楽教育を再考する必要がある。

著者は前回の研究(持田, 2009)において、3歳児クラスの幼児の音楽的な表現を「共振」に着目して観察した結果、「共進」が幼児一人ひとりの音楽的発達の基礎を豊かにする可能性が示唆された。

本研究では、梅本(2009)が、1～2歳児はまだリズムを完全に同期するには至らないが、リズムに対する身体的反応こそ幼児の音楽表現の認知をみるのに良い指標となる、と述べていることから、1～2歳の幼児を対象に、共振による音楽的リズムの表出過程を観察し、分析した。

研究対象と方法

観察対象児と観察期間

観察対象児は、1歳の男児1名(事例1)、および2歳の男児(事例2) および女児(事例3)である。いずれも著者が所属して音楽指導を行っている保育園に通園しており、保育者に幼児の状況を聞いたうえで、身体性においてリズムの表われが分かりやすいとして選出した。

事例1. K男(男児、観察開始時:1歳6ヶ月)。

- ・埼玉県内私立保育所A園の1歳児クラス(男児4名、女児2名、保育者 女性2名)。
- ・協力家庭 父・母・姉(3歳0ヶ月)。
- ・観察期間 2009年12月(1、2、5、7、10日目の5回)。

事例2. Y男(男児、観察開始時:2歳6ヶ月)。

事例3. S子(女児、観察開始時:2歳8ヶ月)。

- ・埼玉県内私立保育所B園の2歳児～3歳児クラス(男児6名、女児6名、保育者 女性2名)。
- ・観察期間:2009年10月～2009年11月(1、2、4週目の3回)。

観察方法

音楽遊び場面の自然な観察によるビデオ記録、筆記記録を行った。後にビデオ記録を起こし、対象児が音のリズムから自らのリズム運動を表わす様子のエピソード記録を作成した。その後、記録の妥当性につき、K男の母親および各対象児の担当者に確認してもらった。

＜事例1＞:園で「げんこつやまのたぬきさん」を行い、その後、家庭に依頼し、家庭でも手遊び歌を行ってもらい、ビデオ記録、必要に応じて筆記記録をした。(なお、両親からは研究の目的を説明し、映像公開の了承を受け、文書でも了解の旨を記して頂いた。)

事前にK男が、リズムの弁別が可能かどうか、毎週行っている2種類の体操の音楽CD(アイアイ体操、みんなの体操)を2日にわたって別室で個別に2回聞かせて保育者2名、

母親と観察した。

K男は、「アイアイ体操」にはあまり興味を示さなかったが、「みんなの体操」ではリズムに乗って踊ることが2回とも観察された。K男はすでに音のリズムを弁別しており、音のリズムの好みがあり、音のリズムを自分で感じて表していると思われた。

そこで、K男が初めて経験する手遊び歌「げんこつやまのたぬきさん」を10日間にわたって行い、K男が音のリズムから自らのリズム運動を表出する過程を、共振に着目して観察することにした。げんこつ山のたぬきさんの歌は保育者の提言を基に、歌の長さが短く、しかも音程が幼児に馴染みやすいと考えて選曲した。歌の部分を①～④に分けて分析した。

歌:「げんこつやまのたぬきさん」(わらべ歌)

♪げんこつ山のたぬきさんー①部分

おっばい飲んでねんねしてー②部分

抱っこしておんぶしてー③部分

またあしたー④部分

＜事例2・3＞:園における自由な音楽遊びの中で「冷蔵庫」の歌遊びを行い、ビデオ記録、必要に応じて筆記記録を行った。

「冷蔵庫」の歌遊びで、「冷蔵庫の中に何がある?」の歌を歌った後、自分で買い物をする

歌:「冷蔵庫の中に何がある?」作詞・作曲 石井享

♪れいぞうこのなかになにがある? れいぞうこのなか

かはいろんなものがいっぱい。
にんじん(にんじん)、だいこん(だいこん)、カボチャ
(カボチャ)、レタス(レタス)、それから(それから)、
それから(それから)かわいたねぎのしっぽ。」

次に、歌での買い物ごっこを行う。

その後の保育者と歌いながらの活動

○保育者の前の机の上にある食物のカードを買いに行く。(以下 筆者と子どもの即興)

♪幼児「とんとんとん」(呼びかけ歌)

♪幼児・保育者「とんとんとん」(繰り返す)

♪保育者「なあにかごよう」(歌)

幼児「○○ください」(自由な歌い方で)

♪保育者「どうぞ」(歌)

♪幼児・保育者「ありがとう」(歌)

分析

幼児の行動を、小林の理論(1978)である、1)本質的に身体性と捉えている、2)子どもの音楽的意識を身体経験の結果と捉えている、3)リズムが絶えず他のものに接し、両

者は不可分離であるという関係性からリズムを捉えている、の3項目の観点から分析した。なお、本研究で示す語彙は下記の意味として使った。

- リズムの表われ: 同じ動作、または音声(ことばも含む)の反復。
- 共振: 対象児が自発的に身体を使って動かし、関係性において相手とリズムを合わせること。
- 音楽: メロディ、リズム、ハーモニーの3要素から成り立つが、本研究の場合、対象児が3歳未満の幼児であるため、その断片的な部分を含んだものも含む。

結果

事例1. K男(1歳6ヶ月)

1日目(事例1-1): 初めて「げんこつやまのたぬきさん」を聞くと、K男は手遊び歌に興味深くじっと耳を澄ませて聞き、音源である母と姉の身体リズムをみつめることが観察された。またその後の笑い声やにこやかな様子から、その音のリズムをK男なりに受け入れているようであったが、音のリズムに伴う身体的な動きはほとんど見られなかった(写真1)。

2日目(事例1-2): K男の中にすでに前日経験した「げんこつやまのたぬきさん」の音のリズムが部分的に入っていて、笑顔で歌を聞き、部分的に自分からリズムを表わし始めた。歌の②の「ねんねして」の部分で、自分なりにリズム

に合わせて母親によりかかっていることから、言葉をリズムと重ねていると思われる。K男は姉が歌の③④の部分で両手を出すとタイミングを合わせて両手を出し、姉とリズムを合わせて喜んでいた(写真2)。K男は、聴く(聴覚)、見る(視覚)、母親にくっつく(触覚、嗅覚)等の行動を通してリズムを表わし、共振していると思われる。

5日目(事例1-3): ①の部分で、母親を見て模倣してげんこつを重ねる、②の部分で、自ら母親の膝の上に仰向きになる、③の部分で、起き上がり、④の部分で、両手を握って前に突き出し、母や姉とリズムを合わせる、という一連の身体のリズムができて、相手を意識して一緒に合わせようとする様子が観察された。この時、K男が意識的ではないが、事例1-2と同じように、寝る→起きる→手を突き出すという一連の身体の動きをし、前回で「共振」したことを手掛かりに音のリズム全体をつかもうとしていると考えられる。

7日目(事例1-4): K男の中にすでに音のリズム全体が入っていて、自らが身体リズムで母親に働きかけて遊びを初め、一緒に「共振」することを要求した(写真3)。幼いながらも①～④の部分すべてを自らのものとして、手遊び歌のリズムの中に自らのリズム運動を見出しているようであった。

10日目(事例1-4): 姉が「げんこつやまのたぬきさん」を歌いだすと、K男も何やら言葉にならない音声を出して、一緒に机を叩いて歌い遊ぶ姿が観察された(写真4)。K男



写真1. 初めての手遊び歌を神妙に聞く(1日目)



写真3. 「げんこつやま」をやろうと自ら誘う(7日目)

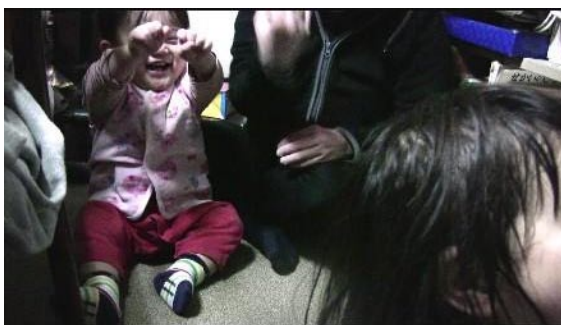


写真2. 部分的に音のリズムを合わせて喜ぶ(2日目)



写真4. 姉と歌のリズム遊びを楽しむ(10日目)

は、「共振」の繰り返しによって自分のものとして獲得した音のリズムを、楽しんでいると考えられた。

事例2. Y男(2歳6ヶ月)

1週目(事例2-1):Y男は、初めて聞いた音のリズムを聴いてはいたが、身体的な表れはみられなかった。

2週目(事例2-2):先週行った歌遊びを覚えていて、その音のリズムが耳に入ると、参加したくなり、自分から歌っている側に来て席に座った。Y男は見る(視覚)、聴く(聴覚)等を通して経験した短い遊び歌の部分「とんとんとん、なあにかごよう」の4節の部分に対して、自ら身体を使ってリズムを取り、首を振って音声を出しながら保育者と「共振」していると考えられた。

4週目(事例2-3):この頃になると、歌のリズム全体に慣れてきた。Y男は、「冷蔵庫の中に何がある」の長い歌のリズムすべてを理解していないようであったが、皆で音のリズムを合わせて歌う限定された場面(品物の名前を歌う)では、共振を楽しんでいるようであった。保育者と音のリズムを合わせる場面、例えば短い8節の「トントントン、なあにかごよう」の部分では、積極的に保育者とリズムを重ね、前回よりも音声の出し方や腕の動きが滑らかで、ゆとりがみられた。

Y男の中に音のリズムが入っていて遊びの中でそれを表わし、気付いた3歳児のM子のリードのもとで、獲得した音のリズムを楽しんでいるようであった。Y男は、分かりやすい音のリズムを他と「共振」して獲得し、他の場面でも楽しんでいるようであった。

事例3. S子(2歳8ヶ月)

1週目(事例3-1):もともと音楽的なことが好きなS子は初めから、この曲の持つ歌のリズムに関心を示していた。しかし、音のリズムを聞くことで一生懸命で、まだ音のリズムに慣れてなく、身体から表われるリズムや音声にぎこちないところが見えた。

2週目(事例3-2):歌を聞くと思いだしたように楽しそうに身体を揺らした。まだ歌詞は覚えていないが、S子の好きな音のリズムが、部分的に入り始めたと思われた。また保育者の後を追って一緒に模倣して歌を重ねる箇所を、大きな声で大きく身体を揺らして歌い、最後の「ありがとう」と声を合わせる場面では、保育者と共に声を合わせて歌っていた。このことから、他と音のリズムを重ねながら、共振するのを楽しみにしているようであった。

4週目(事例3-3):歌遊びの流れが大体わかってきて、笑顔が多く見られた。S子は前回、他と「共振」した「とんとんとん」という分かりやすいリズム部分をすでに自分のものとし、その箇所を滑らかに腕を振ったり、身体も揺らし

たりしながら歌っていた。さらに友だちが歌う部分でも身体リズムを重ねるようにして、楽しそうに「とんとんとん」と歌っていた。S子は「共振」した部分の後の流れもすべて覚えていて、保育者と楽しくやりとりをしていた。

考察

1. 対象児が表わしたリズム

対象児たちには、経験や興味、周囲の状況等によって違いがみられたが、意識的であれ、無意識的であれ、自分が音のリズムを感じると、視覚、聴覚、触覚、嗅覚等の諸感覚をその時々働かせながら、身体の筋肉からリズムを模倣して表わすことが見られた。そして、音楽的なリズムを聞きその模倣をするには、まず聴覚から音のリズムが入った後、人の身体的なリズムを見てその視覚的なものを手掛かりとして、人と合わせようとするものが示唆された。

K男は、1日目は本能的に床を鳴らすだけであったが(事例1-1)、2日目になると母や姉の身体リズムを模倣することから、人とリズムを合わせて「共振」した。(事例1-2)。5日目ではすでに経験した「共振」したリズムを身体が直ぐに表わし(事例1-3)、さらに7日目では、自ら身体を使って他に「共振」しようと働きかけていた(事例1-4)。K男はリズムを模倣して繰り返して人と合わす過程で共振することを見出し、その身体性を手掛かりとして音楽的なリズムの中に自らのリズム運動を表出していると思われる。

またK男の特徴として、フレーズごとに大きくリズムを捉えて共振していることがみられた(表1)。そこでは「ねんねして」の場所で、他の人が表わしていない身体性で自ら寝ているように、「共振」する中に言葉や言葉のリズムが入り込んでいると推測できた。

また対象児たちのリズム表現の時間は短い、頭を振る、うなづく、手を叩く、身体を左右に揺らす、腕を回す、伸びあがる、腰を振る、ジャンプする、声を出す等、個性的であった。例えば同じ音のリズムを共振する過程であっても、Y男のリズムの表現(事例2-2)と、S子の(事例3-2)のリズム表現では大きく違いがあった。

Y男は、2週目にばらばらに動いていた手や腕が(事例2-2)、4週目では「とんとんとん」の歌の場面で手の動き、腕の動き、目の動き、声を一致して、共振し始めるようになった(事例2-3)。一方音楽的なことを好むS子は、1週目では声が出ず、動きも小さくぎこちなかったが(事例3-1)、すでに4週目には「とんとんとん」と相手とリズムを合わせて大きな声が出し、滑らかに身体を大きく動かした(事例3-3)。対象児たちは自分の音やリズムを独自に身体で感じる繰り返により、個々に「共振」を実感していくと思われる。

表1. K男のリズムの表われと表情(事例1:2009年12月の観察記録、ビデオ撮影から抽出)

歌	①げんこつやまのためきさん	②おっぱいのんでねんねして	③だっこしておんぶして	④またあした
1日目 (保育者・母・姉)	神妙に聞く。身体は固まっている。姉をじっと見る	表情はない。数回床を叩く。	保育者を見る。立ち上がる。	場所を離れる。終わると母や姉を見て声を出して笑う。
2日目 (母・姉 筆者)	母の隣で、にこやかに聞く。歌と一緒に身体を揺らす(3回)。	母親によりかかる。笑顔。	起き上がり筆者の手を見つめじっと歌を聞いて両手を出す。タイミングを待つ。にこやか。	満面の笑みで筆者に合わせて両手を出す。両手はグー。笑う。得意げ。母姉を見る。
5日目 (母・姉)	母を注視。歌を聞くと、げんこつを胸の前で拍手のように叩き合わせる。身体揺れ。	身体をずらして母親の膝に力を抜いて大きく仰向けになる。	起き上がって母親をじっと見て、両手を出すタイミングを待つ。にこやか。歌を聞く。	満面の笑みで筆者に合わせて両手を出す。両手はグー。得意げに母を見て笑う。
7日目 (母・姉)	(げんこつを叩き、母を誘う)歌を聞くと母を見て、げんこつを叩き合わせる。笑顔。体の揺れ。	母親の膝ににじりよって仰向けのように寝る。笑顔。姉を見る。	ギュッとだいてもらい満面の笑顔。タイミングを待つ。姉との笑い声。	母に合わせて両手をチョキの様に前に出す。母のグーを見る。笑い声。
10日目(保育者・姉)	姉の歌を聞く。机を叩き始める。	夢中で机を両手で同時に叩く。歌声のような音声を出す(だー)。姉も叩き始める。	姉が叩くのを見る。夢中で机を叩く(リズムは不安定)。音声を出す。	姉の歌と合わせるように夢中で叩く(姉は一定だがリズムは不安定)。音声を出す。

また初期のK男は姉が「共振」を楽しんでいる姿に無表情であった(事例1-1)が、2回目には自ら「共振する」タイミングを待って笑顔を見せ(事例1-2)、「共振」する場が多くなると共に、笑顔やリラックスして母親と関係した。Y男は他の友だちの共振を経験しながら、Y男なりに緊張を解いて保育者と「共振」しようとし始めた(2-3)。またS子(事例3-3)は同じリズムでの「共振」の経験が広がると、別の場面でそのリズムを使って他に働きかけようとした。これらから、対象児が感じたリズムは常に他のものに不可分離に接着し、それを「共振」することで意識し始めていることがみえる。

2. 「共振」の音楽的意義

今回の研究対象である1～2歳の幼児たちは、無意識のうちにもそれぞれの経験や特性によって音のリズムの箇所を選び、満足している様子がみられた。3歳未満の対象児たちが人と共に表わすリズムは正確なビートを刻んでもおらず、メロディを表すこともほとんどなく、非常に原始的ともいえる。しかし「共振」した場面からみるとそこには音楽の3要素である、メロディ的なもの、ハーモニー的なものが混在していた。そして、その混在しているものを、他と一緒に表わそうとする意欲や楽しさを、「共振」の過程から汲み取ることができる。

Swanwick (1988) は、乳幼児の音楽的発達はその遊びの中にあり、マスタリー、模倣、想像的な遊び、のおおまかな過程を通して発達すると述べ、音楽的活動においてもマスタリーへの衝動は赤ん坊も持っていて、その連続的な発達

が確かにあると述べている。そして、子どもの音楽的な模倣は単なる模写ではなく、共感、感情移入、関心、また自分を他の事物や他の人に見立てることまで含む我々の行為と思考の幅を拡大させることである、とも述べる。

このSwanwickの理論から対象児の「共振」をみてみると、まだ対象児たちが「共振」したリズムを使って想像的に遊ぶことや、完全にマスターすることは不可能だが、1・2歳児なりに、はじめはなんとなく模倣するだけであったリズムを、言葉や相手を感じながら、断片的に自分の持てる力を使って、音楽的にリズムを感じながら想像的に表わしていくと思われる(事例1-4、1-5、2-3、3-2、3-3)。また、次第に自分なりにではあるがリズムを自分のものにしている。このように対象児は音のリズムを個々に自らのリズム運動として感じ捉えながら「共振」の経験を繰り返すことで、次第に音楽的になっていくと考えられる。

3. 今後の乳幼児音楽教育に向けて

現在、脳科学の研究が進歩して、乳幼児の知性の発達に多くの教育者や保育者、保護者が目を向けるようになった。そこでは、保育現場にいる者が、著者も含めて乳幼児の音楽的能力を、その拍子、テンポ、旋律の能力だけで見ることも陥りやすい。しかし乳幼児の音楽的な発達を支えるには、現場の保育者しか見ることのできない、その場、その時々子どもが表す音楽的な脈絡を知り、支えることも重要になってくる。しかし幼い子どもの音楽的な表現に注目することは難しい。そこで、乳幼児が他とリズムを合わせて「共振」する過程の姿に注目することによって、その子

どもが人と音楽的に感じたり、創造的に演じたりする姿が見えやすくなってくると考えられる。

中村(1993)は、音楽が私たちの心に染み入るのは、リズム体である音楽と同じくリズム体であるわれわれ一人ひとりに深く共振を引き起こすからであると述べている。本研究においても、対象児たちは音のリズムを獲得するのを楽しみにしていて、分かりやすく、共感できる音のリズムの部分から自らのリズム運動を見つけて共振していた。そこでは幼児は大人とは違って、その歌や言葉のリズムを感じて模倣しながら、ゆっくりと時間をかけて人と「共振」しながら自分のものとして取り込み、繰り返し使い、喜びながら成長していく過程がみえた。

これらから考えると、乳幼児の音楽教育において小林(1978)が述べるように、音楽的環境を整理すること、子どもにとって分かりやすい呼吸にあった素朴な音楽を用意することも必要である。そこでは、子どもが自由に自ら音楽的なものを感じて動作出来る環境、つまり人や言葉のリズム、外界のリズムを保育者が意識することが求められる。それは乳幼児が他とのリズムを感じて「共振」しやすい環境を用意することでもあるといえる。保育者は音楽的なモデルとして音楽的な環境を示す中で、子どもが音のリズムの中に自らのリズム運動を見出しながら、音楽的に成長していく過程を共感しながら援助していく姿勢が求められる。

結論

本研究では、「共振」に着目して、幼児が身体から表わすリズムを追った。1歳の男児1名、2歳の男児1名、女児1名を対象に観察した結果、対象児たちは感じたリズムを身体的に模倣して繰り返し、「共振」することを手掛かりとしながら、自らのリズム運動を表出していた。そして、他と共感しながら、自ら見出したリズム運動を使って「共振」することで、次第に音のリズムをマスターし、それを使って自分なりに遊ぶことにつながっていた。この過程は、Swanwick(1988)の「模倣」、「マスタリー」、「想像的遊び」という音楽的な発達過程と一致していた。これらのことから、幼児が音楽のリズムの中に自らのリズム運動を見出

すには、「共振」を手掛かりにしていることが示唆され、「共振」は子どもの音楽的な育ちに重要なものであると考えられる。

文献

- 青木久子(2007): 幼年教育者の問い. 萌文書林, 東京.
- 細田淳子(2004): ことばの獲得初期における音楽的表現(10). 日本保育学会 **57**, 172-173.
- 石井 亨(1997): クラスでうたうこどものうた3. In: 井上伸子(監修), 地球まるごとワッハッハ. 音楽センター, 京都.
- 小林宗作(1978): 大正・昭和保育文献集. 日本ライブラリ, 東京.
- 小山朝子(2004): 乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現保育学研究. 保育学研究 **42**, 129-138.
- McDonald, D.T. and Simons, G.M. (1989): *Musical Growth and Development*; 神原雅之, 難波正明, 里村正英ら訳(1999): 音楽的成長と発達—誕生から6歳まで. 溪水社, 広島.
- 持田京子(2009): 幼児の共振と音楽的発達. 日米高齢者保健福祉学会誌 **4**, 111-121.
- 持田京子, 金子智栄子(2008): 子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響. 文京学院大学人間学部研究紀要 **10**, 38-39.
- 中村雄二郎(1993): 表現する生命. 青土社, 東京.
- Radocy, R.E., Boyle, J.D. and Rudolf, E. (1979): *Psychological Foundations of Musical Behavior*; 徳丸吉彦, 藤田芙美子, 北川純子訳(1985): 音楽行動の心理学. 音楽之友社, 東京.
- Swanwick, K. (1988): *Music, Mind and Education*; 石井信生, 長島真人, 吉富巧修ら訳(1994): 音楽と心と教育. 音楽之友社, 東京.
- 梅本堯夫(2003): 子どもと音楽. 東京大学出版会, 東京.
- 山下郁子(2003): 3歳児のリズムの獲得. 国立音楽大学附属幼稚園紀要(保育実践研究創刊号) **1**, 7-14.
- 山下郁子(2005): 総合リズム教育の理論と実践. 国立音楽大学附属幼稚園紀要(保育実践研究第3号) **3**, 39-45.

Importance of the Resonance in the Development of Rhythm and Music in the Children of 1-2 Years Old

Kyoko MOCHIDA

School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : Temporal changes in rhythmic movements of one- and two-year old children were observed, and the results were analyzed on the view points of theories of Kobayashi (1978), Nakamura (1993) and Swanwick's (1988). The infants got the rhythmic movement day by day when they were repeatedly singing a nursery song "Genkotsuyama-no tanuki-san" (Case 1) and "Reizouko-no naka-ni nani-ga-arui" (Cases 2 and 3). The present results showed that the infant could find own movement in the rhythm of the sound as a clue by resonance. It is therefore considered that the resonance is an important factor in children's musical development.

(Reprint request should be sent to Kyoko Mochida)

Key words : 1-2 years old children, Rhythm, Resonance, Musical development

